

新聞連載小説として読み直す アルフレッド・ジャリの『訪問する愛』

合 田 陽 祐*

1898年5月、『ユビュ王』（1896）で知られる劇作家のアルフレッド・ジャリ（Alfred Jarry, 1873-1907）は、小説としては2作目となる『訪問する愛（*L'Amour en visites*）』を、ピエール・フォール社から50部限定で刊行する。同社は当時、好色本の出版で一部の界限には知られていたが、それまでのジャリが前衛文学の正統たるメルキユール・ド・フランス社から著作を刊行してきたことを鑑みると、かなり意外な版元である。そしてもう一つ、この小説を論じる者が決まって言及するのが、そのアンバランスな作品構成だ。前半の7章までは、主人公リュシアンが各章で女性宅を1人ずつ訪問する反復的な構成になっている。だが後半の4章ではもはやリュシアンは登場しないため、前半のストーリーとの連続性が感じとれず、別の作品を読んでいるかのような印象を受けるのだ。それゆえ当時からこの作品の評価は低く（というより批評家からはほぼ無視され）、ジャリ研究者のあいだでも、もっとも扱いづらい作品となっている。

ジャリは編集者のピエール・フォール宛と思われる手紙のなかで、この作品を「小説（roman）」と呼んではいるが¹⁾、はたして言葉の正確な意味で同作を小説と呼べるのだろうか。作品後半部の中核を担うのは1896年3月に『白色評論』誌に発表された戯曲『山の長老（*Le Vieux de la montagne*）』である。これは同誌の著名な編集者フェリックス・フェネオンの依頼に応じて執筆されたテキストで、独立した筋をもつ難解な象徴劇だ。同作を単行本未収録のまま放置したくないという作者自身の願望があったのだろうが、採用された文体やジャンルの違いだけでも、この小説後半部の異質さは際立っている。

しかし残された最初期の作品プランを見ると、作者にとってこの構成上の不均衡が意図的なものであったことがわかる。ジャリは象徴主義者としての作品には似つかわしくない前半部の月並みな構成をカバーすべく、そこに後半部の晦渋なテキスト群をあえて接ぎ木したのでらう。このように互いに異質なものの同士をあえて同じ空間内に並置することで、読み手のさまざまな解釈を誘発する手法は、実はジャリの読者にとってはおなじみのものである。ただそれを

* ごうだ ようすけ 山形大学

承知のうえでも疑問は残る。ジャリの作品にふさわしからぬ前半部のテキストの読みやすさは、いったい何に由来するのだろうか。この問題は長いあいだ研究者を悩ませてきたが、近年の発見により謎は解明された²⁾。単行本収録のうち前半部の第5章までが、大衆文芸新聞『ドン・ジュアン (*Don Juan*)』(あるいは『ドン・ファン』、「プレイボーイ」の意)に連載されたテキストの再録だったのだ。ジャリにとって一般紙での連載はこれが初めての経験であった。それだけにジャリの執筆戦略を再検証する余地はあろう。

以下では、これまで論じられてこなかった同紙掲載時のテキストを中心に分析をおこなう。まず連載開始にいたる経緯を説明し、次いで『ドン・ジュアン』紙の特徴を述べたのち、最終バージョンとのテキストの異同^{ヴァリエーション}を示す。決定稿となる単行本では少なからぬ加筆がなされている。最後に追加テキストの検討をとおして、上記の加筆の特徴を詳らかにする。最終的には、『訪問する愛』の前半部が新聞連載小説であったことが、完成された作品の成り立ちにどのような種の影響を及ぼしているのかを明らかにしてみたい。

1 連載開始までの経緯

『訪問する愛』の最初のプランが練られたのは、第一作目の小説となる『昼と夜』(1897年3月刊)の脱稿後、同年の夏から秋にかけてのことだと考えられる。この時期以降に書かれたものと推定される作品の章立てを記したメモが残されている³⁾。それを見ると、出版された最終バージョンとはじゃっかん異なるが、すでに作品の構想と枠組みは出来上がっていたことがわかる。このプランには上述した『山の長老』もすでに含まれている。とはいえジャリは、あとで見るように、新聞での連載にあたって、2つの章を1つの章に統合したり、テキストの順序を入れ替えたりするなど、さまざまに手を加えることになる。

ところで当時のジャリは、1893年の文壇デビュー以来の「危機」に見舞われていた。それまで作品を刊行してきたメルキユール・ド・フランス社の執行部から、次回作(『訪問する愛』)の出版を拒まれたのだ。その背景には、同社発行の文芸誌『メルキユール・ド・フランス』の実質的な主筆であるレミ・ド・グールモン(1858-1915)との不仲があった。無名の新人であったジャリを同誌に招いたのはグールモンであり、彼らは1894年に版画雑誌『イマジエ』を創刊して共同編集にあたるほど、当初は意気投合していた。グールモンには夭折した友アルベール・オーリエ(1865-1892)を始めとして、年少で才能のある若者を偏愛する傾向があり、この条件を満たすジャリには多大な信頼を寄せていたのだ。当時、グールモンには年長のベルト・ド・クーリエル(1852-1916)というミュージブがいた。彼女はグールモンの小説『シクスティーナ』(1890)のヒロインのモデルとなった人物である。

文学好きのベルトもまた、若く才能豊かなジャリに好意をもち、やがてこの年少者にしつこ

く付きまとうようになる。だが元来ミソジニーの傾向があるジャリにとって、過度に干渉してくるベルトは疎ましい存在でしかなかった。そしてとうとう 1895 年に事件が勃発する。メルキユール社社主のアルフレッド・ヴァレットの妻で作家のラシルド（1860-1953）が主催する同社のサロンで、ジャリはベルトの作品のパロディ——彼女の文学熱を小馬鹿にした詩——を書いて、それを同人に回覧したのだ。そのテキストにはグールモンの名も記されていた。このことを知ったグールモンは激怒し、以後メルキユール社からジャリの著作が刊行されることはなくなった。グールモンによる有名な象徴主義者のアンソロジー『仮面の書』（第一巻 1896 年刊、第二巻 1898 年刊）にもむろんジャリは不在である。ジャリのモノグラフィーを書いたパトリック・ベニエは、グールモンの束縛に耐えかねたジャリが、この年長者と距離を置くために、あえて上記の行動に出たのだと推測している⁴⁾。

ただしさすがにメルキユール社からの出版拒否は、ジャリにとって想定外の事態であっただろう。グールモンとの関係悪化以外に、前作の『昼と夜』の売れ行きが芳しくなかったこともあり（初版に増刷がかかることはなかった）、ジャリは『メルキユール』の文学サークルから事実上排除されるのである。こうしたグールモンの嫌がらせに対する報復として、ジャリは『訪問する愛』の第 3 章に、「老嬢の家で (Chez la Vieille Dame)」と題するテキストを挿入するにいたる。「老嬢」とは同人のあいだで流通していたベルトの綽名である。この章の前半部は、ジャリがベルトから受け取った親密な調子の「書簡」や、一日に何度も送られてきた「電報」のコーナーからなり、作者ジャリの実体験に基づく露悪的なテキストになっている。

『メルキユール』の最高顧問役でもあったグールモンの後ろ盾を失ったジャリは、同誌の同人のなかでもっとも親しかったラシルドに次著の出版の世話を求めた。皮肉なことにラシルドは、ベルト・ド・クーリエルをたきつけたのは、実はジャン・ド・ティナンと自分であったとのちに告白している。それゆえ事件後のジャリの境遇に責任の一端を感じたのだろうか、あるいは自分がホストであったメルキユールの文学サロンの分裂を恐れたのだろうか——ラシルドは請われるままにジャリに救いの手を差し伸べる。1897 年 9 月 16 日頃に送付された返信のなかで、ラシルドはジャリに版元を 2 つ紹介している。彼女はまずピエール・フォールの前に、レイナルドとコンタクトを取るよう、若い友人に勧めていた⁵⁾。前者の知名度が低いことと、何より出版物のジャンル（好色文学）がジャリにはふさわしくないと判断したためだろう。

だがピエール・フォールの反応は想定よりも素早く、2 日後の 9 月 18 日には、ラシルドはフォールから色よい返事をもらうことになる。このラシルド宛の書簡で、フォールは『訪問する愛』の出版に興味があるので、ジャリに自分のもとへマニユスクリ（草稿）を送るよう指示を出している⁶⁾。すでにジャリは前年の制作座での『ユビュ王』上演時のスキャンダルにより名をあげつつあり、知名度の面では申し分なかった。だがそれ以上に、文壇でじゅうぶんなキャリアと名声を確立していたラシルドの後ろ盾がいかに強力であったかが、フォールの文面

から窺える。ラシルドは前衛的なエロティック文学の著名な書き手としてだけでなく、『メルキュール』誌で小説時評欄を担当する、優れた鑑識眼を備えた批評家でもあったからだ。

ジャリはフォールの指示どおりに草稿を送付したのだろうか。少なくとも彼はこの時点でまだすべての草稿を書き終えていなかったと考えられる。もしすでに作品を書き終えているならば、わざわざ連載を開始する必要もなかったであろう。ジャリが『ドン・ジュアン』で連載を始めるのは、1897年10月10日号からである。この号には、連載の開始を予告する、編集部の手による次の短いテキストも掲載されている。

以下のタイトルで、われわれは本日、アルフレッド・ジャリの一連の未発表コント集を読み始める。若くしてすでに著名な『ユビュ王』と『夜』〔ママ〕等の著者だ。

『訪問する愛』はわれら読者の関心を引きつける。これは、あらゆる環境とあらゆる社会に見られる現代的愛についての斬新かつ美的感覚に富む研究である⁷⁾。

掲載テキストを一読すればわかるように、上記の「現代的愛」とはすなわち売春のことである。ジャリを『ドン・ジュアン』編集部で紹介したのは、自身も同紙に連載をもっていたラシルドの可能性が高い。ラシルドを仲介役として、ピエール・フォールがジャリに同紙での連載を提案したのではなかろうか。『ドン・ジュアン』とピエール・フォール社は、後述するように深いつながりをもっていたからだ。ジャリは先に触れたフォール宛書簡のなかで、同紙での連載テキストにも触れて、これを自著のリストに加えている。この履歴書代わりの手紙は、おそらく単行本宣伝のための著者紹介用か、単行本の出版を協議する編集会議用に書かれたものだろう。そうであるならば、連載開始時にはまだ単行本の出版は正式には決まっていなかったことになる。おそらくジャリは、同連載の機会に、すでに書いた下書き原稿に手直しを加えつつ、物語の構成を再度練り直しながら書き進めていったのだ。ここで連載前の最初のプランと新聞掲載時の章立てを比較してみよう。

最初のプラン（連載前）	『ドン・ジュアン』掲載時
I. Chez Manette	I. Chez Manette
II. Chez Manon	II. Chez Manon
III. Chez Margot	III. Chez la Vieille Dame
IV. Chez la Voisine Cousine	IV. Chez la Grande Dame
V. Chez la Vieille Dame	V. Chez la Petite Cousine
VI. Chez la Grande Dame	

左側の最初のプランで第3章に登場する予定であったマルゴは、右側の連載時には第5章に登場する「いとこの娘」の名前に変更になっている。さらに名詞の前に形容詞 « Petite » が置

かれることで、直前の第4章「貴婦人 (Grande Dame)」と「大小」のコントラストが生まれることになる。このように連載にあたり、ジャリが構成を念入りに再検討し、その結果として章と章のあいだに連続性が生まれていったことが確認できる。なお決定稿で「いとこの娘のもとで」に続く第6章と第7章については、最初のプランのとおりになっており、決定稿とのあいだにタイトルの異同は見られない。

フォールにしてみれば、『ドン・ジュアン』での連載中は、ジャリが真に自分の叢書にふさわしい作家であるかどうか、品定めをするための「お試し期間」にあたる。じっさい『ドン・ジュアン』に掲載された作品が、ピエール・フォール社から単行本化されて出版されるケースがしばしば見受けられるのだ。同紙に必ず毎号広告掲載されている単行本の目録「『ドン・ジュアン』の図書館 (Bibliothèque du *Don Juan*)」にも、心理学やエゾテリズム、東洋思想関係の著作の傍らに、ピエール・フォール社刊の小説がまざっていることが確認できる (図1参照)。以上から推察できるように、一般的に『ドン・ジュアン』での連載は、来るべき単行本出版に必要不可欠な「通過儀礼」でもあったのだろう。

BIBLIOTHÈQUE DU DON JUAN	
Livres d'amour, Traités spéciaux et scientifiques, Albums illustrés, etc.	
Nous expédions ces livres <i>franco de port et d'emballage</i> , contre mandat dans toute la France, et mandats internationaux pour l'étranger. (Les mandats au nom de M. l'Administrateur, à Paris, 18, rue Feydeau.) Pour recevoir recommandé ajouter 0,25 par volume.	
N.-B. — Les expéditions de librairie ayant lieu tous les Samedis, nous prions nos clients de nous faire parvenir leurs commandes le vendredi matin au plus tard.	
A. HEPT <i>L'épousé</i>	3 50
A. HOUSSAYE. <i>La robe de la mariée</i>	3 50
WILLETTE et DARZENS. <i>Les nuits à Paris</i>	3 »
DUCHESSÉ LAULIANNE. <i>Pour être aimée</i>	3 50
— <i>Le bréviaire de la femme élégante</i>	3 50
C. LEMONNIER. <i>Un mâle</i>	3 50
R. LESCLIDE. <i>Coutes extra galants</i>	6 »
G. MENDES. <i>Le roi vierge</i>	3 50
— <i>Méphisphéla</i>	3 50
DUBUT DE LAFOREST. <i>L'homme de joie</i>	3 50
P. GARCIAS. <i>Histoires de femmes</i>	3 50
VILLETARD. <i>La chemise</i>	3 50
P. DELCOURT. <i>Le vice à Paris</i>	3 50
Ch. LEROY. <i>Le colonel Ramollot</i>	3 50
A. BREANT. <i>Dans la rue. Chansons et Monologues</i>	3 50
HENRI DE REGNIER. <i>Poèmes</i>	5 50
F. VIELÉ GRIPIN. <i>Poèmes et Poésies</i>	3 50
FERDINAND HEROLD. <i>Paphnutius</i>	3 50
ALOYMÉS BERTRAND. <i>Gaspard de la nuit</i>	3 50
C. FROMENT. <i>Virginité fin de siècle</i>	3 »
PIERRE LOUYE. <i>Les chansons de Bilitis</i>	10 »
RACHILDE. <i>Le Démon de l'absurde</i>	3 50
A. DUBARRY. <i>Les Déséquilibrés de l'amour, le Fétichiste</i> , 1 fort volume	3 50
H. GERMOISE. <i>Une maîtresse riche</i>	3 50
JORD'EGLY. <i>La cravache de mademoiselle</i>	3 50
E. MONTIL. <i>La grande Babylone</i>	3 50
RESTIF DE LA BRETONNE. <i>Sarah</i>	3 50
P. VÉRON. <i>Galop général</i>	3 50
ALPHONSE ALLAIS. <i>Vive la vie</i>	3 50
Ch. AUBERT. <i>Nouvelles amoureuses</i>	3 50
PAUL ARENE. <i>Domnime</i>	3 50
F. HUCHER. <i>Amour de Chair</i>	3 50
ANDRÉ GILL. <i>La muse à bibl.</i>	2
M ^{me} DE GARCHES. <i>Secrets de beauté d'une Parisienne</i>	2 50
G. d'ESPARBÈS. <i>La légende de l'aigle</i>	3 50
REMY BROUSTAILLE. <i>Bizarres</i>	3 50
EMILE ZOLA. <i>Nana</i> , édition illustrée	6 »
— <i>La débacle</i> , dess. de Jeannot	7 »
JULES LIBER. <i>Les pantagrueliques</i> , avec eaux fortes de Mesples, au lieu de 10 francs	5 »
EMILE ZOLA. <i>La faute de l'abbé Mouret</i> , 1 fort volume, nombreuses illustrations	3 50
ALPHONSE DAUDET. <i>Sapho</i> , nombreuses illustrations	3 50
— <i>Tartarin de Tarascon</i>	3 50
C. BRIO. <i>A huis clos</i> , illust. au lieu de 5 fr.	3 50
FLIRT. <i>Doux sarcins</i>	3 50
MEUNIER. <i>Chair à plaisir</i> , ill.	3 50
BRIOT. <i>Chattes et regards</i>	3 50
O'CANTEIN. <i>Peine de cœur</i>	3 50
MAIZEROT. <i>Le mal d'aimer</i>	3 50
— <i>Mire Lon La</i>	3 50
MASSIAC. <i>Joyeux devis</i>	3 50
MEUNIER. <i>Miettes d'amour</i>	3 50
— <i>Baisers tristes</i>	3 50
SYLVESTRE. <i>Le péché d'Eve</i>	3 50
THILDA. <i>Pour se damner</i>	3 50
RENÉ EMERY. <i>L'amour à toutes les sauces</i> , 1 beau volume illustré	3 50
G. BRANDIMBOURG. <i>Croquis du vice</i>	3 50
VICTOR JOSE. <i>Paris-Gomorrhée</i> , études sur le vice à Paris	3 50
— <i>Le demi-monde des jeunes filles</i>	3 50

図1 「『ドン・ジュアン』の図書館」のカタログ

2 『ドン・ジュアン』紙とその読者層

『ドン・ジュアン』は『世紀末 (*Fin de siècle*)』や『パリ生活 (*La Vie parisienne*)』と並ぶ、世紀末を代表する文芸娯楽新聞である。19世紀末には、作家たちの手により創刊された1880年代の「小新聞 (*petit journal*)」や1890年代の「小雑誌 (*petite revue*)」の流行があったが、上記3紙はこれら前衛文芸新聞や雑誌とはまったく異なる位置づけをもつ。じっさい『世紀末』や『ドン・ジュアン』は決して革新的な試みとはいえ、1863年創刊の『パリ生活』以来、むしろすでに手垢にまみれた大衆のジャンルに属していた。ただし『ドン・ジュアン』は性風俗のうち、売春にほぼ特化している点でやや特殊である。

判型では『ドン・ジュアン』は『世紀末』と同様、大判2つ折りの挿絵入り新聞となっているが、創刊は後者より約4年半遅い1895年6月である。発行管理人はA=H・ボネで、事務所はパリ右岸18区のフェイドー通り18番地に置かれた。創刊にあたり1号の価格は10センチメートルに定められていた（ほかに年間定期購読があった）。はじめ4ページの週刊紙（毎週土曜発行）として登場し、1896年末からは木曜と日曜の週2回発行に移行している（ジャリの連載時は週2回発行）。創刊からしばらくのあいだは、紙面でも原稿の募集がおこなわれていたので、作品掲載のための審査の敷居はそこまで高くはなかったのだろう。新聞のタイトルに含意されているように、記事には世紀末の性風俗を扱ったものが多く、一言でいえばボルノグラフィーが新聞のカラーとなっている。掲載された文学作品も、このジャンルに属する読み物が大半を占めていた⁸⁾。

紙面にはクリソンによる「恋愛の授業」、シャルル・ポワソンによる「姦通」、シモニス・アンピによる「准尉夫人のドレス」、ルイ・ラトゥレットによる「愛の劫罰」、フレッド・アールによる「夜の婚姻」といったテキストが並ぶ。これらの作品のジャンルは、短篇のコント、中篇のヌーヴェル、その他のファンタジーの3つに分類されている。ただし掲載作品にはマシユクルによる「愛の技法」などのエッセイも含まれており、『ドン・ジュアン』は総合的な性風俗の文化紙としての位置づけをもっていたようだ。それゆえ同紙に掲載された作品の純粋な意味での文学的価値は疑わしいにしても、世紀末の中年男性向けの娯楽文化を知るうえでは、資料的価値の高い文献といえよう。同紙とジャリがこれまで寄稿してきた『メルキュール』や『白色評論』といった前衛文芸誌との違いは、何といてもその読者層にある。『ドン・ジュアン』の記事には、一般大衆が通読できる内容であることと、とりわけ娯楽的要素（中年男性読者が楽しめる内容であること）が求められたのだ。これについては同紙の「創刊の辞」も見てみよう。

『ドン・ジュアン』は毎号、ニュースや反響、芸術家のポートレートを提供し、たえず

魅力的で斬新なものを探求することになる。最後に同紙は、最愛の人に捧げるために毎日新たな珍しい花を発見して、喜ばせたいと願う恋人のような気配りと注意、心遣いをするようになる⁹⁾。

ただし同紙の売りは、プレイボーイになるための知識の提供だけではない。上の引用にあるように、現代風俗にかんする記事に加えて、観劇やコンサートなどの各種文化イベントの充実した情報欄が設けられ、当時流行りのイラストレーター（クーチュリエ、E・グロ、A・ヴィリエ等）によるエロティックな挿絵が挿入されていることが、『ドン・ジュアン』の特徴である。新聞の第1面と第4面は、これらの画家たちによる不倫の現場（ベッド・シーン）や浜辺での女性たちのヌード等を描いた作品に飾られている。文学作品の書き手としては、創刊号に記された協力者のリストを見ると、ゾラ（『狩り』）とカチュール・マンデスを筆頭に、ドーデやポール・ブルジェ、オーレリアン・ショールやジャン・リシュパン、ヴェルレーヌなどの大御所に加えて、ジャン・ロランやジョルジュ・デスパルベス、オスカル・メテニエやジョルジュ・クートリーヌ、ラシルドやゲールモンなど、前衛諸派の中堅どころの作家たちが寄稿していることがわかる¹⁰⁾。ほかにもルイ・デュミエールやレオ・トレズニック、アルフレッド・ヴァレットやシャルル・メルキといった名も見られる。

現代のわれわれから見ても豪華なラインナップが実現したのは、同紙が単行本の売れ行きや知名度にかかわらず、流行の文学を取り入れる傾向をもっていたからだ。掲載作品には姦通や売春の斡旋、倒錯など性的な主題を扱ったものが多く、先に述べたようにこれはピエール・フォール社の刊行物の傾向に通じる。『ドン・ジュアン』で連載をもつためには少なくとも以下の3つの条件があった。第一に、話題性の高い作家であること。第二に、掲載作品は未発表のものに限ること。そして第三に、現代風俗を扱っていることだ。これらの条件を連載時の『訪問する愛』（以下では「連載版」と表記する）は満たすことになる。

同作の物語の概要は、主人公の青年リュシアンが、未婚女性や婦人たちの部屋を訪問し、売春のかたちで愛の手ほどきを受けることで、性的に成熟していくというもので、いわばジャリ版『感情教育』（教養小説）といえよう。生娘から女中娼婦、プロの娼婦から老女にいたるまで、さまざまな女性の年齢別の生態、ないし彼女たちとの恋の駆け引きの様子が描かれるのだが、これも男性読者の多い『ドン・ジュアン』紙が求める傾向と完全に合致するものだ。そもそも物語に娼婦たちが多く登場する自体、ジャリの趣向に基づくものというより、同紙のメイン・テーマ（売春）にすり合わせたものだと考えられる。これは物語内容が、掲載紙の方針に影響されたものになるという、世紀末の定期刊行物ではよく見られた現象である。

連載開始時の紹介文では、『訪問する愛』は「コント集 (contes)」と紹介されていたが、じっさい連載テキストは一話完結のコント形式になっている。この一話完結は連載には非常に

適した形式である。また各回のタイトルは「〔何某〕のもとで（« Chez [X] »）」に統一されている。のちに単行本として刊行される『訪問する愛』は、連載時のこれらの形式的特徴を留めている。物語の冒頭で、主人公のリュシアンは、アパートマンの外壁を装飾の施された管を伝ってよじ登り、第1章のヒロインである、女中で若い娼婦のマネットの部屋に侵入する。夜這いという古典的な愛情表現が用いられるのも、この作品ならではの特徴である。のちにくわしく見るが、連載時のテキストでは、夢や幻覚、個人的な妄想など、これまでのジャリ作品に馴染みのある舞台装置は用いられていない。これも一般読者を想定した、ストーリーを複雑化し過ぎないための作者の配慮の一つと考えられる。

『ドン・ジュアン』での連載記事は不定期掲載だったが、ジャリが発表した5回分はおおよそ10日に1度の頻度で掲載されている¹¹⁾。上のペースで連載を続けるためには、各章で一つずつ異なる愛のかたちを描くという単純な構成が好ましかったのだろう。この構成には同時に、作者にとって執筆が容易になるという利点があるが、他方でそれは、ジャリのこれまでの読者にとってはやや拍子抜けするものである。というのもジャリの散文作品は、とくにその「語り」の複雑さを売りにしてきたからだ。

先説法や、フラッシュバックを軸とする後説法の多用により、物語の時間軸を錯綜させるのが従来のジャリ作品の語りの特徴である。だがこうした語りの技法は『ドン・ジュアン』に連載されたテキストでは一切用いられない。ジャリの作品でもっともリーダブルな『ユビュ王』(1896)ですら、場面の転換やストーリーの思いがけない展開が随所に見られることを踏まえると、以上がいかに特殊なことであるかがわかるはずだ。これは連載各回の紙幅に制限があったため、複雑な語りを構築し、それを展開するための十分なスペースが確保できなかったためだとも考えられる。単行本刊行時に書き足しが行われるものの、前半部の各章のみ、長さが均質でコンパクトな作りになっているのは、連載時の名残である。

現代性風俗を描いた『訪問する愛』は、ジャリの作品中もっとも自然主義小説に接近しているという点で興味をひかれるが、異性愛が描かれるのも同作が初めてである。前作の『昼と夜』では、主人公サングルとその弟ヴァレンスの同性愛的兄弟愛が作品のテーマとなっていた。男性同性愛や両性具有のモチーフは、1894年の戯曲『アルデルナブルウ』以来、ジャリ作品の代名詞となってきた。その後の作品でも、ジャリが異性愛を描くときは、『絶対の愛』(1899)での継母との近親相姦や、『メッサリナ』(1901)での王妃の売春など、特殊なケースに限定されるだろう。この点でジャリは、一貫して倒錯的な愛を描き続けたラシルドと作風においても近い位置にいた書き手であった。

ピエール・フォールや『ドン・ジュアン』での連載を紹介した当時のラシルドは、出版の世話だけでなく、作家としてジャリの成長を望み支援する立場にあったのだろう。1898年の春からは、パリより南東に30キロほど離れたコルベイユの地に居を構えたヴァレット夫妻と、

ジャリを含む少数のメルキュールの同人が、共同生活を始めている。その前後はジャリとラシルドの関係が密接になる時期であり、このタイミングでの『ドン・ジュアン』の連載は、ジャリが変化するための重要なターニングポイントだったに違いない。多種多様な売れっ子作家の未発表作品が読めるのが、『ドン・ジュアン』のセールスポイントであるが、同紙で連載をもつ以上、ジャリはこれまでの前衛的なスタイルを一時的に封印し、一般大衆でも理解可能なテキストを書く必要があったからだ。掲載する媒体に合わせて作風を変化させるのは、文筆家が成功を手にするための必須条件であるが、それまでは『メルキュール』の専属同人であったジャリにとっては、最初の挑戦でもあった。おそらく不本意ではあっただろうが、ジャリはこの条件付きでの連載を引き受けざるを得なかった。

『ドン・ジュアン』での連載は5回で終了するが、これは編集部の交替に伴い、編集方針が大きく変更され、紙面も刷新されたためだ。そのまま連載を継続する作家もいたが、ジャリはおそらくその必要性を感じなかったのだろう。少なくとも連載中止の理由は、ジャリが書きあぐねていたためではない。連載第7回までのテキストはすでに準備されていたと考えられるからだ。じっさい第7章までは物語に一貫性があり、均質的な文体が用いられている。ジャリは掲載分をもって、単行本化に向けて十分な量がすでに用意できたと判断したのだろう。じじつ、連載自体は外的な要因により尻切れトンボで終わってしまったものの、連載終了後に、ジャリはピエール・フォールから単行本化の許可を取り付けている。連載作品の質（文学的な質でなく、一般読者に向けた読みやすさの質）が合格ラインに達したのであろう。だがこの時点では、ジャリはまだ、編集者フォールに作品後半部のプラン（難解な象徴劇『山の長老』などを追加すること）を秘密にしたままである。

3 テキストの^{ヴァリエーション}異動

連載版と決定稿のあいだには、細かなものも含めると、無数のテキストの異同が見られる。以下ではそのうち重大な加筆がおこなわれている2箇所を検討してみたい。一つ目は第1章「マネットのもとで」と第2章「マノンのもとで」に見られるものだ。比較的よく知られているようにこの2つの章で、ジャリは「内的独白 (monologue intérieur)」と比較しうる語りを採用している。内的独白とはエドゥアール・デュジャルダン (1861-1949) が『独立評論』時代に発明した新しい語りの技法だ。それが初めて披露されたのは、1888年刊行の中篇小説『月桂樹は切られた』においてである。その後、同技法はグールモンの『シクスティーナ』(1890)でも用いられるなど、象徴派の作家のあいだで少なからぬ数の模倣者が続いたため、「自由詩」と並んでこの運動の代名詞にもなった。

物語の冒頭でリュシアン「内的な思考」は、科白として発話される代わりに、地の文とし

て書きつけられている。そこでは主人公の心理が細やかに綴られているのだが、ジャリはデュジャルダンのように一人称の「わたし」を用いる代わりに、三人称の「彼」を用いている。ゆえに内面の声であるにしても、これを独話と呼びうるかについては留保が必要だ。この内的独白に近接した語りに関連づけるかたちで、ジュリアン・シューが注目したのは、ジャリが用いる言葉遊びである¹²⁾。リュシアンの内面的な思考の変化がイタリックで強調される次の例を見てみよう。

彼〔リュシアン〕はしばらく考え、ニヤリとすると、また跨いでいく。

みな昔ながらの訪問に挑戦しているのだ。

愛はアカデミーの肘掛け椅子のようなもの。コーヒーを飲みながら、平静を装うため、最近の受賞者のスピーチについてのジャーナリストたちの批評を読む。彼は一人の候補者……、カンディエ……、カンディード……、候補者だ。足が滑る。小さな礫が剥がれ落ちる。思ったよりも速くは登れない¹³⁾。

このシーンで重要なのは現実とリュシアンの妄想が二重写しになっている点だ。現実のリュシアンは煉瓦のつなぎ目に足をかけながら外壁をよじ登っている。恐怖心を取り払うために、このときリュシアンが想起したのは、いぜんカフェで読んだ記事である。そこではアカデミー会員のスピーチが取りあげられていた。アカデミーは、詩人であるリュシアンが最終的に目指す場所だ。ところで彼の現在の目的地は、マネット（愛の対象）のいる窓辺にほかならない。彼にとって、アカデミー会員の座席と、彼女の愛人の地位は、目下どちらも手に入れるのが困難な対象である。

こうしてアカデミー＝愛人の「候補者 (candidat)」という語が、ある種の観念連合によって、類似した音をもつ別の語と結びついていき、意味が自動的に横滑りしていく。その結果生み出された2語のうち、「カンディード (candide)」は「純粋な」という意味の形容詞にして、ヴォルテールの小説の遍歴の主人公の名であり、「カンディエ (candie)」はギリシアのクレタ島の都市イラクリオンの旧名である。『訪問する愛』の執筆時の1897年には、オスマン帝国領であったクレタ島で大規模な反乱が起こっており、当時大きな話題を呼んでいたのだ¹⁴⁾。

同章のもう少し進んだところで、ジャリはこの「愛」と「アカデミーのひじ掛け椅子」を結びつけた動機について、注釈をくわえている。この二つのかけ離れたイメージの結合には、「アカデミー (académie)」の語に、もともと「裸体画」という意味が含まれていることが関係しているというのだ。そのゆえ、この「アカデミー」の語を発音するたびに、リュシアンの脳裏に「小さな裸の女たち」というエロティックなイメージがつねに喚起されるのだ。

彼は別のコーニスの上にくる。こいつは支えになる。

「そうだな、お前さん、ひじ掛け椅子に座っているようだな！」

ノートをめくっていると、このひじ掛け椅子という語がいつも頭のなかで繰り返される。同様にアカデミーという語も……。裸体画のモデル (académies), まったく出来損ないの小さな裸の女たちの観念が、いつも頭に浮かぶのだ¹⁵⁾。

あとで別の例も見るが、ジャリの作品には言葉あそびが頻出する。この手の観念連合は、一見かけ離れた二つのイメージ（「愛」と「ひじ掛け椅子」）が、それらに付随する語 (académie) に含まれる言外の意味（「裸体画」）をとおして結びつく、意味先行型のタイプである。ところでこの「小さな裸の女たち」は、『ドン・ジュアン』の紙面のタイトル・ロゴ両脇に配されたデッサンを想起させる（図2参照）¹⁶⁾。ガルニエ版全集で指摘されているように、この発想（「愛」と「アカデミーのひじ掛け椅子」の結合）は、デュジャルダンが用いた「ライトモチーフ (leitmotive)」の手法に非常に近いものだ。ある語やそれが喚起するイメージが起点となって、そこから特異な「意識の流れ (flux de conscience)」が形成されているためである¹⁷⁾。

ジャリはこの言葉に喚起されるイメージの観念連合を、第2章の「マノンの家で」において、次のごとく「ブルターニュ人の固定観念 (idées fixes de Breton)」と命名している。「木陰の肘掛け椅子に座らされたように彼〔リュシアン〕は感じる。頭が傾き、船の縁につかまりたくなる。現在の方向感覚によれば、彼は悪天候のなか、まちがいなく小型船に乗っているのだ。／ブルターニュ人の固定観念が彼をふたたび捉え、夜光クラゲのような柔らかい形に魂を吐き出す、彼岸嵐の大潮に居合わせた船乗りたちの運命を彼は思い浮かべている¹⁸⁾。」ここではリュシアンの妄想のなかで、ひじ掛け椅子が船へとかたちを変えている。今やリュシアンは眼の前に広



図2 『ドン・ジュアン』タイトル・ロゴ両脇の裸体の女性

がる大海原で、荒波にのまれる船乗りになりきっているのだ。このようにリュシアンは妄想は、彼に固有の内的なヴィジョンを自己の外部に投影することで、現実を奇妙に二重化させる役割を果たしている。

ただし連載版のテキストを精査すると、リュシアンがブルターニュ人であるという設定は、連載が終了したのちに付け加えられたものであることがわかるのだ。これまでのジャリ作品、とくに『昼と夜』は自伝的作品になっており、主人公のシングルが幼年期を過ごしたブルターニュを回想する場面が盛り込まれている。次回作の『絶対の愛』(1899)もやはり、ジャリがリセ時代までを過ごしたブルターニュ地方を舞台とする小説である。ただしこの主人公の出身地の設定は、熱心なジャリの読者ならいざ知らず、『ドン・ジュアン』の一般読者にとっては不要であり蛇足である——このようにジャリは判断したのだろう。さらに重要なのは、上で見てきたリュシアン「意識の流れ」を記した言葉遊びのくんだりも、連載版には丸ごと含まれておらず、単行本刊行直前にあとから書き足した部分であるということだ¹⁹⁾。

連載スペースの問題もあっただろうが、『ドン・ジュアン』の読者層からすると、複雑過ぎる構成は避けるべきだとジャリは判断したのだろう。このように『訪問する愛』において、象徴主義につながる文学的実践——すなわち現代のジャリの読者にとっての「読みどころ」——がすべて加筆された部分であるのは、非常に重要なことである。なぜならジャリは、大衆向けに書かれたテキストを、単行本に収録するために再利用するさい、前衛的な傾向があまり見られないと評価できる前半部においても、テキストに意味の深みを与えるために、懸命に手を加えていたことが明らかになったからである。その目的はひとえに、単行本の読者にテキストの多様な読みを促すことにある。

ところでジャリは連載時からこののちに実行する加筆を想定していたのだろうか。少なくとも連載時の書き分けは、一方では新聞の一般読者のためであり、他方では編集者フォールの期待に沿うかたちで実施されているのはたしかである。むしろジャリは、連載時のかたちのまま、テキストを単行本に再録することを望んではいなかっただろう。連載後のやりとりのなかで、フォールが原稿を細かくチェックしないタイプの編集者だと知ったジャリが、単行本を準備する一連の作業のなかで、加筆を開始したと考えるのが自然である²⁰⁾。

もう一つの重要なヴァリエーションは、第3章「老嬢の家で」に見つかる。先に述べたように、ジャリはこの章においてベルト・ド・クーリエルからの私信と電報を公開している。だがその部分は連載版には存在しておらず、決定稿であとから付け加えられたものなのである²¹⁾。連載版にはリュシアンと老嬢の対話しか掲載されていないため、「老嬢」の正体は暗示されているに過ぎない。すなわち決定稿のように、「老嬢」が実在の人物であると理解できる読者は、それがベルト・ド・クーリエルの綽名であることを知る『メルキュール』の関係者以外にはいなかったであろう。

単行本刊行3ヶ月前の1898年2月16日付のジャリ宛書簡で、連載版への加筆を本人から聞いていたラシルドは、次のようにジャリに懇願している。「くれぐれも、描き方と……素行には気をつけて……せめて、小さな天才であるあなたの将来を汚さないようにして……²²⁾」ラシルドの懸命な説得にもかかわらず、ジャリは決定稿で私信を公開してしまう。それによりゲールモンおよび『メルキュール』との決裂は決定的なものとなる。『訪問する愛』刊行直後に『メルキュール』に発表した同書についての書評のなかで、ラシルドは自分の忠告を無視したジャリをたしなめるような書き方をしている。

楽しむことは正論を述べることに勝る、と彼〔ジャリ〕は信じていて、脳抜き〔*décervelage*〕（同「歌」を参照）とかいう何だかよくわからない遊びに興じるために、哀れな老嬢たちの死体を一握りにして、われわれの顔めがけて投げつけてくる。これは王子さまの遊びだ。それもよからう！ だが悪気のない人たちが目に入るのはしばしば不快である。たとえ文学熱を小馬鹿にして、彼女らのいる台座の上からあなたがたに向けて彼女らを突き飛ばすことに同意するとしても²³⁾。

もはやラシルドにもジャリを擁護することは不可能となった。『訪問する愛』の単行本が出版された（バルトからの私信が同作で公開された）1898年5月に、『メルキュール』からの「ジャリ外し」が確定される。ゲールモンの面子を保つには、もはやそれ以外に方法がなかっただろう。じっさいこの月に、同誌へのジャリ名義での最終寄稿となるテキストが発表されている。ジャリの代表作となる『フォストロール博士の行為と意見』（死後刊行）の中核をなす博士による諸島巡りである²⁴⁾。

以後ジャリは、1899年までは同社からの単行本の出版を希望し続けたが、それが叶わないことを悟ると、翌年以降は活動の舞台を編集者フェネオンのいる『白色評論』へと移すことになるだろう。『メルキュール』の同人との交流は以後も続いたが、ジャリが参加することを許されたのは、ヴァレットやラシルド、ピエール・キヤール等、限られた友人たちだけのより小規模なサークルである。

4 追加テキスト

ジャリの最初のプランでは、先に見たように『山の長老』を単行本に再録することはすでに決まっていた。だが同テキストを中心とする後半部と、前半部を構成する連載テキストのあいだにはストーリーの断絶がある。そのため前半部と後半部を連結するための蝶番役のテキストが必要になった。おそらくその目的のもとに執筆されたのが、第8章の「愛のもとでの恐れ

(La Peur chez l'amour)」だ。最初のプランには不在であった同テキストは、第7章までのリュシアンへの訪問を総括する重要な役割を果たすことになるだろう。この章とは対称的に、同じく連載後に執筆された第6章「婚約者のもとで」と、第7章「医者のもとで」は、内容的にも平明であり、連載時からの流れを汲むテキストと位置づけられる。リュシアンが元婚約者に唇を噛まれたときに、性病をうつされたと思ひ込み、医者のもとに診察を受けに行くというのが、この章のおもなあらすじだ。

「愛のもとでの恐れ」は単行本刊行の1か月前に、『白色評論』の1898年4月15日号に発表されている²⁵⁾。このテキストは全体が「恐れ」と「愛」という擬人化された2者の対話からなる。そこでは前章までとは雰囲気が大きく異なり、抽象的で形而上学的な思弁が展開されている。この章にはもはやリュシアンすら登場しない。だがクラシック・ガルニエ版で指摘されているように、この章での「恐れ」と「愛」の対話は、(リュシアンの)「ペニス」とその相手の「ヴァギナ」のあいだで交わされたものと解釈できるのだ²⁶⁾。それゆえ、このことに気づくことができた読者のみに、物語を前章から続く連続性の観点より読むことが許されているといえる。それを確かめるために、ここで性交シーンの記述を抜き出して見てみよう。挿入後のペニスの視点から次のように暗示的に語られている。

わたしが死の予兆を感じたのは、あなたの悲運の回廊のなかだった！ 密閉性の高い扉が開くやいなや（この扉に鍵はかかっておらず、あるのは銅製のノッカーだけで、何度も殴られると溶けるように開いた）、呪われた家の空気を吸い込まないように、わたしは唇と鼻孔を押さえて入っていった²⁷⁾。

同章の終盤には言葉遊びをとおして、以上の種明かしがなされている（次の引用で「愛」(ヴァギナ)と「恐怖」(ペニス)の性別が逆になっているのは、「愛 (l'amour)」が男性形、「恐怖 (la peur)」が女性形の単語であることに由来する)。「愛 —— わたしが日の光を閉じ込めている檻…つまり…／恐怖 —— そんな冗談はやめて！ この部屋は神聖なの (sacrée) だから。／愛 —— 聖別されているのでしょうか (consacrée), マダム²⁸⁾。」「愛」の最後のセリフ「聖別されているのでしょうか」は、同音の「神聖なる女陰でしょう (con sacré)」と読みかえることができる²⁹⁾。

やや下品なモチーフだが、ラシルドの証言によれば、このテキストの真の作者はジャリではなく、ラシルドその人であるという。残されたマニエスキリの筆跡はジャリのものに相違ないが、クラシック・ガルニエ版全集の編者が指摘するように、ラシルドが執筆したテキストをジャリが清書した可能性もある。上記の証言が事実であれば、『訪問する愛』にはラシルドとの共作の部分が含まれることになる。さらに小説の前半5章が『ドン・ジュアン』に事前発表されていたことがわかったことで、ラシルドが作品に出版前に目をおしていたことが確実と

なった。これによりリュシアンによる「訪問」を総括するために、ラシルドがジャリに協力した可能性が高くなったといえよう。

たしかに「愛のもとでの恐れ」には、ジャリに固有の思考パターンや語彙が見られるが、ラシルドはジャリが『メルキュール』に発表してきた作品を熟知していることを忘れてはいけない。彼女がジャリのパステイッシュを試みるのはさほど困難ではないだろう。最初のプランに「愛のもとでの恐れ」が不在であったことを考慮しても、同テキストの作者はやはりラシルドなのだろうか。

われわれがあらためて注目したいのは、「愛のもとでの恐れ」で暗示の手法が用いられていることである。「恐れ」は「ペニス」を、「愛」は「ヴァギナ」をそれぞれ暗示していた。前半部の総括を試みた同章で提示されたシェーマにしたがうならば、第7章までに描かれていたのは、リュシアンの「ペニス」が、「ヴァギナ」という「理想」ないし「絶対」に到達するための「探求」であったということになる。「愛」と「恐れ」の対話は、表面的には観念的かつ形而上学的なものに映るが、じっさいにはすべてが物質的かつ即物的な現実（性行為）のメタファーである。こうした記述の二重性は、前節で検討した第1章と第2章の「ブルターニュ人の固定観念」にも見られたものだった。

そこで問題になっていたのもやはり、世界の物質的な側面とその観念的な側面という、現実に含まれる二重性とその「総合」であったからだ。リュシアンは、眼前に広がる光景（マネットのいる窓）に、固有のヴィジョン（アカデミーのひじ掛け椅子）を投影することで、この二重性を現出させていた。解釈によって引き起こされるこの「現実の二重化（*dédoublement de la réalité*）」のテーマを含んでいることが、加筆されたテキストの特徴だといえる。一見すると前半部とのつながりが見えてこない第9章の『山の長老』もまた、ハシッシュ服用により作動する幻覚のヴィジョンをとおして、現実を二重化する物語であったことを思い出そう。周知のとおり「幻覚（*hallucination*）」は、前作の『昼と夜』のテーマの一つであり、ジャリの作品に頻出する装置である³⁰。

前半部と後半部のあいだには、文体レベルでの温度差はいぜんとしてあるが、前半部を総括しつつ、物語の意味を二重化する難解な「愛のもとでの恐れ」のエピソードが挿入されたことにより、当初のプランよりは連続性がかなり意識できるようになったのはたしかである。ジャリがほかの作品同様、『訪問する愛』を一冊の「小説（*roman*）」と規定していたことについて先に触れたが、もしかするとそれは、こうした物語の構成に「一貫性（*cohérence*）」を付与するための作業に、最後まで努力を惜しまなかったからではないだろうか。この意味で、現実の二重化のテーマを別の章と共有するテキスト「愛のもとでの恐れ」に、ジャリのアイデアが用いられている可能性も捨てきれない。

すでに見たように、連載終了後の既発表テキストへの加筆の目的は、多様な読みに耐えうる

よう、テキストを複雑化させ、進化、転生させることにあった。それゆえ連載テキストがもつ固有の文脈を外れた、新しい読みの可能性や、異なる解釈を促すテキスト「愛のもとでの恐れ」を、最後に追加するアイデア自体は、少なくともジャリ自身のものであったと考えられるのではないか。

結語にかえて

ジャリが創作の途中で、当初のプランを変更するにいたるまでの大胆な加筆をおこなった例は、『訪問する愛』以前の作品にも見つかる。たとえば4幕からなる象徴劇『反キリスト者セザール』(1895)は、当初は1幕のみで完結する予定で雑誌に発表された。その後の大幅な加筆により、同劇はまったく異なるものに生まれ変わることになる。では『訪問する愛』の特殊性とは何か。それはひとえに新聞連載時のさまざまな制限のなかで執筆が進められたことにある。すでに書かれた平凡なテキストを、最小限の加筆によって、いかに芸術作品と呼びうるものに近づけるか——これこそが同作の賭金であっただろう。むろんジャリが引き続きメルキュール社から同作を刊行していれば、執筆過程はそれほど複雑にはならなかったはずだ。じっさい、自筆草稿のファキシミリ版による出版で、メルキュール社から50部限定の「委託販売」となった『絶対の愛』(1899)には、一般読者への配慮はまったく見られない。

すでに見てきたとおり、『訪問する愛』の執筆過程は、『山の長老』など既発表テキストを除けば)連載版とその加筆、そして追加テキストの3段階に分けることができる。加筆と追加テキストには、それがなくとも物語の進行には問題が生じないレベルで、さまざまな仕掛けが施されていた。すでに検討した「愛のもとでの恐れ」以外の追加テキストにも、こうした物語を複雑化するための仕掛けが見つかる。第9章の「ミューズの家で」は、全体が散文で書かれているが、ほぼすべての箇所、密かに韻が踏まれているのだ³¹⁾。クラシック・ガルニエ版の編者は、これを師マラルメの「詩句の危機」(『詩と散文』(1894)所収)に対する忠実な弟子ジャリの返礼と解釈している³²⁾。別の章にマラルメの詩へのオマージュが見られることから³³⁾、たしかにそのように考えることも可能だろう。

だが同時に、表面的には連載版テキストの流れを継承しつつも、ジャリがひそかに押韻を忍ばせていることこそが重要ではあるまいか。この散文の外観に「包み隠された韻文」という装置をとおして、一部のエリート読者のみが解釈行為(この場合はむしろ韻文の「発掘調査」だろうか)を楽しめるように、テキストに深みが与えられていると考えられるからだ。優れた書評家でもあったラシルドは、完成間際の加筆後の『訪問する愛』のなかに、それまでのジャリ作品とは異なる「軽さ(légèreté)」の表現を読み取っている³⁴⁾。たしかに前作『昼と夜』との違いに注目するならば、そのように言うことができるかもしれない。だが本稿で繰り返し確認して

きたように、たとえメルキュール社を離れることになったとはいえ、同作の決定稿には、前衛作家としてのジャリのこだわりが、決して少ないとは言いきれない箇所がちりばめられている。このことは、新聞連載版との詳細な比較をおこなってきた、われわれのみが知っていることなのである³⁵⁾。

註

- 1) Cité dans Thieri Foulc, « L'art honorable du curriculum vitæ: une lettre inédite de Jarry », in *Viridis Candela*, Le Publicateur du Collège de 'Pataphysique, n° 9 (8 absolu 144), Collège de 'Pataphysique, 15 septembre 2016, p. 66. ジャリは自作の副題で「小説 (roman)」の語を「物語」の意味で使うこともあるが、ここでは文学ジャンルの「小説」が問題となっている。
- 2) *Don Juan, Journal bihebdomadaire littéraire, artistique, illustré*, 1895-1897. (*Ibid.*, pp. 66-70.) ただしこの論考の著者ティエリ・フルクは、前註で言及された書簡に基づく新発見を報告したのみで、本稿のような詳細な分析はおこなっていない。
- 3) Voir Alfred Jarry, *Œuvres complètes*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1972, pp. 1248-1249.
- 4) Patrick Besnier, *Alfred Jarry*, Fayard, 2005, p. 206.
- 5) *Ibid.*, p. 320.
- 6) Jean Marvier, « Lettres de Pierre Fort éditeur de l'*Amour en Visites* à Alfred Jarry », in *Viridis Candela*, Dossiers du collège de 'Pataphysique, nouvelle série, n° 22-24 (29 Phalle XG), Collège de 'Pataphysique, 7 septembre 1963, p. 20.
- 7) La Rédaction, « L'Amour en visites », *Don Juan*, troisième année, n° 124, dimanche 10 octobre 1897, p. 1. むろん『夜 (*Les Nuits*)』は『昼と夜 (*Les Jours et les Nuits*)』の誤植ないし誤記である。
- 8) 『ドン・ジュアン』を売春斡旋の問題から論じた次の研究も参照のこと。Helen Crask, « Periodicals as *proxénète*: Erotic complicity in *Don Juan* (1895-1900), in *French Studies*, Vol. LXXVI, n° 3, pp. 366-384. URL: <https://doi.org/10.1093/fs/knac099>
- 9) La Rédaction, « Don Juan », *Don Juan*, n° 1, samedi 8 juin 1895, p. 1.
- 10) *Ibid.*, même page.
- 11) 連載テキストの詳細は次のとおり。I. « Chez Manette », *Don Juan*, n° 214, 10 octobre 1897, p. 2. II. « Chez Manon », *Don Juan*, n° 217, 21 octobre 1897, p. 2. III. « Chez la Vieille Dame », *Don Juan*, n° 221, le 4 novembre 1897, p. 2. IV. « Chez la grande dame », *Don Juan*, n° 225, le 18 novembre 1897, p. 2. V. « Chez la petite cousine », *Don Juan*, n° 228, le 28 novembre 1897, p. 2.
- 12) Voir Julien Schuh, *Alfred Jarry, le colin-maillard cérébral*, Honoré Champion, coll. « Romanisme et modernités », 2014, pp. 491-494.
- 13) Alfred Jarry, *L'Amour en visites*, dans *Œuvres complètes*, t. III, Classiques Garnier, 2013, p. 265.
- 14) Cf. *Ibid.*, p. 278 (note en bas de page).
- 15) *Ibid.*, p. 266.
- 16) ジャリは決定稿において、『ドン・ジュアン』に言及している（連載後に加筆された部分）。

- Ibid.*, p. 279.
- 17) *Ibid.*, p. 255.
- 18) *Ibid.*, p. 276.
- 19) 加筆されたのは非常に重要な部分だが、かなり煩雑な作業になるため、残念ながらすべての詳細を提示することはできない。
- 20) ジャリは単行本化にさいして、「山の老人」以外にさらに『白色評論』に既発表の戯曲「異なるアレスティス」も再録しようとしたが、枚数が増えすぎのためフォールに拒否されている。Cf. Jean Marvier, *op. cit.*, p. 25.
- 21) 決定版での加筆は以下のとおり。Ayant su les vingt ans de Lucien, から L'entresol de la vieille dame. の前まで、「TUA RES AGITUR」を含む全文。
- 22) Cité dans Alain Mercier, « À propos de la « Vieille dame » et de Jean de Tinan: Trois lettres de Rachilde à Alfred Jarry », *L'Étoile-Absinthe*, Société des Amis d'Alfred Jarry, n° 46, 1990, p. 18.
- 23) Rachilde, « Les Romans », *Mercur de France*, n° 100, juin 1898, p. 834. 脳抜きは『ユビユ王』で歌われる「脳抜きの歌」を指している。
- 24) Alfred Jarry, « Gestes et Opinions du Docteur Faustroll, pataphysicien. De Paris à Paris par mer », *Mercur de France*, n° 101, mai 1898, pp. 390-421. ただしこのほかに「フォストロール博士」名義の次のテキストもある。Docteur Faustroll, « Commentaire pour servir à la construction pratique de la Machine à explorer le temps », *Mercur de France*, n° 110, février 1899, pp. 387-396.
- 25) Alfred Jarry, « La Peur chez l'amour », *La Revue blanche*, n° 117, 15 avril 1898, pp. 577-581. 同号には同テキストが『訪問する愛』の一部であることは記されていない。
- 26) Cf. Alfred Jarry, *L'Amour en visites*, *op. cit.*, p. 337 (note en bas de page).
- 27) *Ibid.*, p. 334.
- 28) *Ibid.*, p. 337.
- 29) Cf. *Ibid.*, même page (note en bas de page).
- 30) Voir Alfred Jarry, *Les Jours et les Nuits. Roman d'un déserteur*, dans *Œuvres complètes*, t. II, Classiques Garnier, 2012, pp. 688-690.
- 31) Cf. Alain Chevrier « Des vers cachés dans *L'Amour en visites*. Prose rythmée et prose rimée chez Jarry », *L'Étoile-Absinthe*, SAAJ, n° 119-120, 2008, pp. 63-74.
- 32) Cf. Alfred Jarry, *L'Amour en visites*, *op. cit.*, p. 252.
- 33) *Ibid.*, p. 323.
- 34) Cité dans Alain Mercier, *op. cit.*, p. 19.
- 35) 本稿は「JSPS 科研費：課題番号 19K00491」および「19KK0295」の助成を受けた研究の一部である。

要 旨

1897年10月10日から11月28日にかけて、アルフレッド・ジャリは「週2回発行の挿絵入り新聞」の『ドン・ジュアン』に、『訪問する愛』の総題のもと、5つのエピソードを発表する。のちに同書の決定稿で第1章から第5章となるこれらのテキストは、新聞編集部により「コント集」と命名されている。本稿では、先行研究で未検討の上記連載テキストを、1898年5月にピエール・フォール社から刊行された決定稿とつき合わせながら検討する。その目的は、単行本出版前のヴァージョンに存在したいくつかの重要なテキストの異同を明らかにすることである。この小説の創作過程の特殊性は、執筆に2つの段階があり、さらには2つの異なるタイプの読者が宛先になっている点にある。ジャリのテキストは、まず新聞に掲載された「事前発表」では、購読者である一般大衆を宛先としている。そして単行本として出版するさいには、テキストに忍耐強く接することのできる、より知的な読者を宛先とすることになるだろう。このことは、連載後に実行された加筆が、テキストを複雑化する方向に向かっていることから明らかである。決定稿で重要な役割を果たしている「内的独白」や「現実の二重化」といった象徴主義的な手法は、連載版には不在であり、あとから接ぎ木したものであったのだ。さまざまな種類の定期刊行物が乱立した世紀末における文学的創造は、このようにテキストが発表されるメディアの性質に大きく左右されていた。単行本の出版前におこなわれた加筆は、すでに書かれた作品を、より変化に富み、後世の読み手による多種多様な解釈に対してより開かれたものとする、「期待の地平」の更新を目的としている。こうして『訪問する愛』のテキスト生成の過程を再検討することで、ジャリが前衛的な文学の制作モデル、すなわち『メルキュール・ド・フランス』や『白色評論』といった「小雑誌」のモデルに忠実であり続けたことが理解できるのである。

キーワード：新聞連載小説、生成研究、加筆、世紀末の定期刊行物、象徴主義

Résumé

Entre le 10 octobre et le 28 novembre 1897, Alfred Jarry publie, sous forme de « contes », les cinq premiers épisodes de son deuxième roman *L'Amour en visites* dans le *Don Juan*, « journal bihebdomadaire illustré ». La présente étude examine ces inédits dans leur rapport avec la version définitive parue en mai 1898 chez Pierre Fort, dans le but de mettre en lumière quelques variantes non négligeables présentes dans la prépublication. La particularité de la rédaction de ce roman se traduit par deux étapes, voire par la présence de deux types différents de ses lecteurs: ses écrits s'adressent d'abord au grand public pour la prépublication dans le journal, puis aux lecteurs patients et plus intellectuels lors de la publication en un volume. La création littéraire fin de siècle est ainsi prédéterminée par son contexte médiatique. Certains ajouts réalisés après la prépublication ont pour visée de transformer son œuvre déjà écrite en quelque chose de plus varié et ouverte à diverses interprétations postérieures. A travers l'examen de la génétique textuelle de *L'Amour en visites*, on comprend que la production jarryque reste fidèle au modèle de la presse d'avant-garde, celle du *Mercure de France* ou de *La Revue blanche*.

Mots-clés : Roman-feuilleton, Étude génétique, Ajouts, Périodique fin-de-siècle, Symbolisme